

国際ロータリー第二七九地区年次大会記念講演

——一九八四年三月十一日 於銚子市——

やさしいロータリーの話

—— 間柄の美学 ——

国際ロータリー第二五八地区パストガバナー

佐藤千壽

やさしいロータリーの話

—— 間柄の美学 ——

佐藤千壽

本日私が、ここに掲げました様な、一寸変わった演題を選ばせて頂きましたのは、実はガバナーの御要請によるものでございます。と申しますのは、地区大会の様なこういう晴の席には、ロータリーの長老方が沢山お集まりですから、そういう方々の前で私が今更ロータリーの話などするのは、本当は気がすまないものであります。然し、ガバナーから記念講演の御依頼を受けるにあたって、どういふ話をしたら宜しいでしょうか、と内意をうかがいましたところ、大会には新会員や御夫人方が沢山見えるのだが、やはりまだロータリーについて本当のことが分っていると云えない—そこで、この機会に、初心者向けに分り易いロータリー講話をお願いしたい、という次第でした。

そういうわけでこの様な演題を考えたのですが、さていざとなってみますと、私自身ロータリーについて本当のことが分っているかどうか、大いに疑問であり

ます。老子の言葉に、「知る者は言わず、言う者は知らず」というのがありますが、何事でも、本当のことは、勉強すればするほど分らなくなるものです。殊にやさしい真理こそ逆に難しいのでありまして、実は演題を決めてしまつてから、「しまった！」と後悔して居ります。小原ガバナールに見事にはめられてしまったわけで、気がついた時は後の祭であります。

然し、ポール・ハリスの著書を読んでみますと、彼自身でさえ「ロータリー最善の道如何」と問われても答えようがない一人の考えは十人十色だから、独断的にロータリーはこうだ、ときめつけることは無益だ、と言っています。要するに、ロータリーには色々の側面があるのでどの面を強調するかによって、人それぞれのロータリー観が出てきます。そこでロータリーでは「寛容」ということが、何にもまして貴ばれるわけであります。ところが、そのことがまた、愈々ロータリーを、「分つた様で分らない」複雑で曖昧なものに致します。それは、ライオンズや、その他数えきれないほどある自由結社と比較してみると一層よく理解できるところで、一面その曖昧さがロータリーの特徴とも言えるでしょう。但し誤解のない様申し添えますが、寛容なるが故の曖昧は、ロータリーの長所であると共に短所でもあります。短所としての曖昧が、今日のロータリーに、「これでいいのか？」という様々の議論を巻き起こしているのではありませんが、ここではその問題には触れません。それは「難しいロータリーの話」

になつてしまいます。

さて今日の約束は、「やさしいロータリーの話」ですが、これとて先程述べた様に、人それぞれのロータリー観があるのですから、「私の考えるロータリー」という域を一步も出ないわけで、先ずその点について御了承を得ておかなければなりません。逆にまた、そういう「私の考えたやさしいロータリー談義」という意味で、長いロータリー歴を持つベテランロータリアンの方々にも、何か考えて頂く種になるかもしれません。またそうなれば大変仕合せに存じます。

そういう次第でありますから、今日は、ロータリーの規則や組織、あるいはまた財団やら青少年交換やら……その他もろもろの奉仕活動等、具体的な問題については何も触れません。そういうことについては、既にこの大会に於て会長代理からも、ガバナーからも懇切にお話があったはずで、それは私の任ではありません。私はここでは、ロータリー・クラブの生れた背景と、またこのクラブの存在が、人間にとって如何なる意義を持つのか、ということについて考えてみたいと思つてあります。ただそれを考える方便として、アメリカのことやら、幾つかの私的結社のことやら、話題があれこれに及びますので、最初に結論を申し上げておきます。

▲およそ自由な私的結社は人間にとってこころの抛りどころである―そしてロータリーは「職業人のこころの抛りどころ」である▼これが今日の話の結論であります。

さて、この結論をより良く理解して頂くために、これから色々なことを申し上げるわけですが、「木を見る者森を見ず」という諺がある様に、皆さんはロータリーという大木に心を奪われて、森を形成している沢山の外の木のことにあまり関心がない様です。然しこの世界に於ては、ロータリーだけが国際的な人間集団ではないのです。宗教的な教団からマフィアの様な暗黒組織にいたるまで、およそこの世には、なん千、なん万という数えきれない程の私的結社としての集団があり、然もその中の相当数が、ロータリーなどはるかに及ばない歴史をもって、今日なおロータリー以上の大勢力を維持しているのです。

綾部恒雄という社会人類学者が「アメリカの秘密結社」という本を書いています。それによりますと、アメリカには現在八百ほどの秘密結社があつて、二千万から三千万もの会員を組織しているといひます。その最大のものにはフリー・メーソンで世界の会員総数六百万人、その中四百万人がアメリカ在住の会員です。アメリカでは成年男子十数人に一人はメーソンの組織に組みこまれてゐるわけで、これは大変な数です。

フリー・メーソンという名前は、皆さんもたいてい一度や二度耳にしておられるでしょうし、戦時中日本のロータリーがフリー・メーソンの衛屋組織だといふ疑を受け、解散に追い込まれたこともあるくらいですから、恐らくどなたもこれには多少関心をお持ちでしょう。また事実、ロータリーの組織には、フリー・メーソンと疑われる

様な、類似の手續が見られます。例えば会員は成年男子に限る。入会には会員二人の推薦を要し、幾段階もの審査をへて、最後に全会員の賛成投票を得なければならぬ。イニシエーションと呼ばれる入会式があつて、ここで誓約させられる——ロータリー・クラブで殆ど何処でも採用している、新入会員のイニシエーション・スピーチなどというのは、恐らくこれと無関係ではないでしょう。

私的結社の問題を考える時、どうしても無視するわけにゆかないのがフリー・メイソンの存在ですから、もう少し綾部氏の著書によってこれを紹介させて頂きましょう。ロータリーは無論秘密結社ではありません。他の多くの結社にくらべてはるかに開放的であつて、ロータリーの中に内緒事など全く無いわけです。然しそれでも入会には厳格な会員選考をするとか、会員だけの特権として、世界中何処のクラブの例会にも出席できるとか、またロータリアンだけにしか通じない特殊な用語とか、やはり一種の秘儀性があるわけです。ここにいう秘密結社とは、そういう秘儀・戒律のもつと厳しい友愛団体 Fraternity をさすのであつて、それが、よく言えば寛大開放的、悪く言えばルーズなのがクラブと呼ばれる結社でしょう。従つて秘密結社と言っても別に非合法の暗いイメージを持つ必要はありません。中にはマフィアやクークラックス・クラン (K・K・K—KUKLOS・CLAN) の様なひどいものもありますが、多くは友愛福祉・相互扶助を目的とした人間集団であつて、ロータリーをよりよく知るためにも

この種の他の結社について知識を求めることは、決して無駄ではないと思います。政治的な、あるいは犯罪的な秘密結社は別にして、こういう友愛集団はただ特有の儀式だけを秘密にするのであって、会員名簿も集団場所も目的も、またその組織も教義も公開されていますから、研究に支障はありません。

さてフリー・メーソンの目的ですが、「人類の完全な発展を確保することができるよう合理的な社会を建設する」とあります。そういう理想と、人種国籍の差別なく博愛人道主義に徹する国際組織である、という点ではロータリーと共通するものがあります。然しメーソンは秘密結社の本義として非公開の集団儀式を堅持して居るのに対し、ロータリーに於てはそんなものは全くありません。ロータリーは思弁より行動を重んずるクラブであります。

フリー・メーソンの歴史となると、これはもう神話に近いもので、「アダムのエデンの園」だとか、「ソロモンの寺院建設」だとか、そんな時代にまで遡る説話もあります。歴史的に確認出来るのは、中世ヨーロッパの大寺院建築を請負った石工達の集団でありましょう。今日でもそうですが、ヨーロッパの職人達は地域ごとの組織やギルドに組みこまれていました。ところが石工というのは、日本の棟梁と同じで、高度の技術者であって他の職人仲間より地位も高かったわけです。それに城や教会はその地域に一つ出来ればおしまいで、また外の仕事場を見つけて移動していくことにな

ります。フリーというのは、こういうギルドに縛られない自由職という意味もありましようし、また特別の知識階級として王侯貴族から保護され種々の義務を免除されていた、という意味もありましよう。

ともかく移動した建築現場では、日本流に言えば飯場を組むことになりませんが、これをロッジと呼びます。今日全く違った組織になったフリー・メイソンで組織の最小単位、即ちクラブに相当するものをロッジと称するのは、ここに起源があります。さてこうして一つの飯場に集まった職人達の中には、石工以外の建築関係者もいるかも知れませんが、ともかく石工を中心にした事業集団として、連帯意識のもとに情報を交換したり、親睦を深めたりしていきます。そしてこういう情報は当然仲間同志の外は嚴重に秘密が守られ、それがまた仲間の結束を固くするわけです。凡そ結社の動機というものは、こういう親睦と相互扶助によるものですが、それが見知らぬ土地となればその連帯感は一層強固なものになる道理で、この点ロータリー誕生の背景と非常によく似ています。

初期ロータリーのことについては、また後で述べますが、ともかく中世、十五世紀以前既にフリー・メイソンは相当大きな勢力になっていたと思われまます。ところが大建築も一段落すると、ロータリー流に言わせてもらえば、会員増強もままならず、組織の維持も危くなってくる、というわけで、その勢力を保持する必要上、職人や建築

家でない人までも会員に入れはじめました。今日フリー・メーソンの正式な名称は、フリー・アンド・アクセプトッド・メーソンというのだそうですが、こうして特別に承認——つまりアクセプトされた人が加わったためでありましょう。そしてこの様に多種多様な人々が入ってくるに従って、フリー・メーソンの性格も著しく変わっていきます。十七世紀頃には、もう会員の質もすっかり変って、思弁的高踏的な団体になってしまいました。

然しこうして会員の職業制限をはずすことによって、十八世紀以後メーソンはどんな世界に拡大していきます。インドにも西インドにも、ロシアにも出来、一七三〇年アメリカに渡ります。一七三一年ベンジャミン・フランクリンが加入し、一七五二年にはジョージ・ワシントンもメーソンの会員になりました。そしてアメリカの独立戦争では、このメーソンの同志的結束が大きな力を果たしたと言われます。その後のフリー・メーソンには様々の変転、消長がありました。幾度かの試練を乗り越えて、今なおメーソンは世界最大の秘密結社として活動しています。然もその圧倒的な組織率を誇るのが、アメリカであります。

ロータリーもアメリカで生まれ、今日なおクラブ数、会員数、共にアメリカが最高なのですが、先程言いました通り、アメリカにはフリー・メーソンを筆頭に数多くのフラタニティやクラブがあって、その会員の絶対数に於ても、また人口比に於ても、恐ら

く世界一でありましょう。歴史的に見ても、それはアメリカ建国以前の英国植民地時代から続く現象で、こういう私的結社を抜きにしてアメリカ社会を理解することは不可能です。

それでは、アメリカ人はどうしてこんなに秘密結社やクラブを作りたがるのか。この点に関して綾部氏は、アメリカに最初に入ってきた白人がイギリス人であって、その後も今日に到るまで、文化的にはアングロサクソンが支配的であること、アメリカの歴史が終始フロンティア——辺境開拓の歴史であること、アメリカ社会が多くの異った移民集団によって構成されていること、という三点をその主な理由として挙げています。第一の理由については、イギリス人というのは階級的、排他的で、党派を作ることが好きであり、また非常に秘密性を重んずるという際立った特質を持っている、というのです。フリー・メイソンが最初に組織として出来上がったのがイギリスであり、アメリカがその植民地になった時いち早くここに支部が出来、またたく間にこの新天地に拡がったのもそのためであります。これを、ポール・ハリスの父祖もまたイギリス人であること、その後ロータリーが海外に拡大して、最初にクラブの結成を見たのがイギリスであり、然もイギリスのロータリー・クラブが自治を主張して、今なおR・I・B・Iという別組織を固守して譲らないこと、などと思ひ合せてみると、またロータリーの別の側面が見えてくる、と思われるのであります。

第二の理由、フロンティアについては、これはもう格別説明されなくともよく分るところで、これこそ必然的に私的結社を生み育てる土壌であり、またコミュニティという概念も、フロンティアを知らずして正しく理解することは出来ません。我々は今ロータリーでコミニュティ・サービスという原語を、社会奉仕と訳して気軽に使っています。この言葉にはコミニュティ・サービスという響きから受ける切実性がありません。フロンティアの無い日本では、コミニュティもありませんし、従って便宜的に用いられる社会奉仕も結局慈善事業に終らざるを得ません。然し開拓者達が直面するフロンティアの厳しい自然条件と、常に敵地にある様な環境のもとでは、同胞の私的結社と隣人のコミュニティ・サービスは、生死にかかわる重大事なのです。

綾部氏の本の中に、ペンシルバニア地方に最初に生まれた結社として、「馬泥棒を捕えて盗まれた財産を回復するための○○組合」というのが紹介されていますが、一八三五年に結成されたある組合の規約では、組合員は「ランデブー地点」と呼ばれる集合地から七マイル以内の範囲に住む人々で組織され、誰かの馬が盗まれたという伝令が走ると、組合員は何をさしおいてもこの「ランデブー地点」に駆けつけなければならぬ。状況に依り、幾組かに分かれて馬泥棒を追いかけけるのだが、もし一定時間内にこの集合地に来ないと、その組合員は規約に従って罰金をとられる。そして一方泥棒がつかまらず、馬をとられてしまった場合には、組合がその馬の保険価格に相当す

る金を被害者に支払う、というのだそうです。この時代のアメリカ人にとって、馬というのは、命に次ぐ大事な財産で、従って州政府の法律でも、馬泥棒はその代価の弁償は当然のことで、その上両耳切斷、足かせに釘づけして公衆の前で三十九回鞭打、然る後六ヶ月の重労働、という嚴刑になっていた、と言われます。

一見ロータリーと関係ない様な、こんな事例を引用したのは、私はこれを読んで、行政区域とは別の、コミニュティというものの概念が実感としてよくつかめたからであります。勿論こんな馬組合は開拓時代の話ですが、今日のアメリカでもこういう時代からのコミニュティ意識はやはり生きて居ります。日本のロータリーが、どうも地域社会から浮き上がり勝ちなのは、コミニュティという伝統の有無と無関係ではないと思われます。

アメリカに私的結社が沢山出来る第三の理由として綾部氏が挙げているのは、アメリカを構成する多種多様な文化的背景を持つ移民の存在ですが、これによって、後続して渡来する同胞救済結社、そして在米する同胞の相互扶助結社、更に民族主義的結社等が作られることになり、一九三一年の調査では、二百種の結社中三分の一が移民による組織だった、と言います。

さて、この様な背景の中で、移民団体、同業組合、保険組合などはまた別に、数多くの友愛組織、奉仕団体がアメリカという風土の中で生まれ、その中の幾つかが海

を越えて国際的な大組織に発展してきました。ロータリーやライオンズはその代表的なものですが、それでは我々のロータリーは、どの様にして生まれ、どの様に變化してきたのでしょうか。そしてまた、外の組織と違うどんな特質を持ったクラブなのでしょうか。

ロータリー誕生の物語は、繰返し幾度も語られていますので、ロータリアンなら誰でもご存知でしょう。然し今日は御夫人方も居られることですし、またその上、「見えざる神の手」というか、この誕生前後の創生期会員の苦悩の中にこそ、ロータリーの基本的性格を決定づける種がかくされているので、敢て私はこの陳腐な物語を繰返します。例えば、人間の基本的体質は既に生まれた時に決定づけられます。精神的な気質は幼時期から少年期にかけて形成されます。それから後、様々の知識や経験が重なって人それぞれの人格が出来るのですが、基本になるのはあくまで体質、気質でありましょう。そういう観点から私はロータリー幼年期を検討してみたいのです。「原点に還れ」ということがよく言われますが、それは、昔の姿そのままに直せ、という様な単純なことではなく、「初心忘るべからず」という熱意の表明であります。そういう意味で、今日ほどロータリーにとって、その原点を見直し、清純な初心に帰ることの必要な時代はないと思われます。私はこの講演の演題を、「やさしいロータリーの話」としましたが、ロータリーの原点、初心は、幼児の素直な眼でものを見、考え

たことと同じ様に極めて単純でやさしいのです。幼児の描いた絵は、稚拙ではあっても純粹で、誰が見てもよく分かります。それが大人になるに従って複雑怪奇な、技巧の多い、またわけの分からない絵になるのは何故でしょう。ロータリーにも似た様なところがあります。

一九〇五年——日本の年号で明治三十八年は、丁度日本海大海戦で日本が勝利をおさめた年ですが、この年の二月二十三日夜、シカゴ市はディアボーン街、ガスタヴァス・ローアの事務所が集まった四人、即ち鉾山技師ローア、石炭商のシルヴェスター・シール、洋服屋のハイラム・ショレー、そして弁護士のパール・ハリスによって、一業一人制のロータリー構想がまとまり、それから会員をつのって、一ヶ月後の三月二十三日に、不動産業のウイリアム・ジェンセン、印刷屋のハリー・ラッグルス、洗濯屋のアーサー・イルヴィン、オルガン製造業アル・ホワイト、保険屋のチャールス・ニュートンを加えて総勢九人、シルヴェスター・シールの事務所が集まって会合を開き、クラブ名をシカゴ・ロータリー・クラブとすること、また役員には、当日の会場主に敬意を表し、会長はシルヴェスター・シールとし、以下幹事ウイリアム・ジェンセン、会計ハリー・ラッグルスとすること、などが決まったのであります。バッジ制定の議案も出ました。イニシエーション・スピーチは先ず会長より、ということでした。現在ロータリーの創

立記念日は最初に四人が会合した二月二十三日になっていますが、こういうクラブ成立の経緯からすると、本当は三月二十三日を記念日とするのが正しい、という説もあります。そして以上の九人がチャーター・メンバーということになりましょう。最初に構想をまとめた四人は、従ってキイ・メンとでも呼ぶべきでしょう。

さてここで注目して頂きたいことは、この九人の創立会員の職業分布状態です。まことに単純明快、この頃はまだ綱領などという難しいものは出来ていませんでしたが、これを見れば、もうこのクラブが何を目的としていたか一目瞭然であります。

現在、ロータリーの外のクラブと違う特徴は何かと聞かれると、よく一業一人制のクラブだ、という答が返ってきますし、これがまたポール・ハリスの独創的な達見だと考えられているむきもある様です。また事実そういう説は、既にポール・ハリス生存中からあったのですが、これについてはポール自身がはっきり否定しています。彼は一九二五年に“*This Rotarian Age*”という著書を出していますが、その中に、職業別会員制度のクラブは、ロータリー以前すでにロンドンに先例があること、また現にアメリカにも同じ様にロータリーによく似た会員組織のクラブが二つあること、などの事実が記されています。彼はまた、“*There is nothing new under the Sun*”——「この世の中に新奇のものなどない」とも言っています。これはポール・ハリスの非常に謙虚な人柄を現す言葉ですが、反面ロータリーといえども決して突如現れた独創

創的な発案ではなく、良心的な人なら誰でも思いつくことで、当時のアメリカの風土、殊にシカゴという町の情況の中で、生れるべくして生れたということをも物語るものです。

先程私は馬泥棒の話をしました。そんなのはまだ生易しい方で、当時のシカゴは地獄もかくやと思われる程の惨憺たる暗黒世界でした。世の中もこれ以上悪くなりようがない、という程の悪徳の極で、金儲けのためなら人殺しだって朝飯前です。不法侵入、不払、計画倒産、取り込み詐欺、夜逃……およそ考えられる限りの悪智恵競争を繰り広げていました。こういう無秩序な腐敗した実業社会を規制する商業会議所のような組織ありません。後年ロータリーで採用された“Service Above Self”という標語とは全く反対の“Self Preservation First”「自衛第一」が、当時のシカゴに生活する者の一番大事な心構えだった、とポールは書いて居ります。取引で相手を騙すのは当たり前のものであって、騙される方が馬鹿なのだ、という道徳観が公然とまかり通っていたわけです。

こういう状況の中でシカゴ・ロータリー・クラブは生まれました。殊に新入の他所^{しんじり}者^{よそ}で、身寄のないポール・ハリスは、「友人として信頼して取引できる仲間」というものを誰よりも切実に求めていたはずであります。そうしてここに同じ様な悩みを持つ同志が集まってクラブが出来たというわけです。もう一度創立会員九人の職業を拾

いあげてみましょう。弁護士、鉦山技師、石炭商、洋服屋、洗濯屋、印刷屋、オルガン製造、不動産業、保険業——これはアメリカのフロンティアに於て、どれもこれも欠くべからざる職業です。そしてこの仲間は互に相手を必要としています。

こうして発足したクラブは、翌一九〇六年の一月に定款、細則を定め、次の様にクラブの目的をはっきり掲げます。

第一条 会員の業務上の利益を振興すること

第二条 社交クラブに伴う親睦その他望ましい事項を振興すること

これで仕事の上の相互扶助と懇親という目的が公然化されたわけです。そしてクラブに Statistician (統計委員) という役職が設けられ、会員同志の取引状況が具体的に記録されて、これを毎例会の席上で報告しておりますが、この制度は一九一二年まで続いております。これはシカゴという悪徳市場にあっては当然の自衛手段であって、初期ロータリーが互惠主義の相互扶助結社だからつまらん、と簡単に片付けてはいけません。儲けるために手段を選ばないという市場原理に対抗して、相手の利益を考へることによって自分も儲けさせてもらう、という新しい原理がここに芽生えてきた、という点に先ず注目して頂きたいのです。勿論こういう相互扶助組織は外にもありました。然しこの道徳的な原理を一層強固にし、普遍的なものに拡充した所にロータリーのロータリーたる所以があるのであって、仲間同志の相互扶助にとどまった他の結社

が消滅しても、ロータリーだけは普遍的職業倫理によって今日まで存続し発展してきたのであります。

ともかくロータリーは、その出発点からして、自分だけの利益を追求してはいけな
い、相手の立場を考へることが大事だ、という純粋な心情を持った人々で構成されて
いましたから、そういう心情に訴へる提言はすぐ採用しました。

この定款が出来たその年のことですが——この年の会長は二代目アル・ホワイトで、
彼が友人の弁護士ドナルド・カーターに入会をすすめたところ、ロータリー・クラブ
というのは何をする所だと聞かれました。そこで先程の定款を見せたのですが、カー
ターは、「会員同志だけの互恵にとどまっている限り社会的存在意義がない」と言っ
て入会を断りました。するとこの報告を受けたポール・ハリスは、成程そうだろうな
らずき、早速第三条として、「シカゴ市の利益を増進し市民の中に市に対する誇りと忠
誠心を普及すること」という文言を追加しました。これを聞いてドナルド・カーター
も喜んで入会したそうです。

さて翌一九〇七年、三年めにポール・ハリスはようやく会長に就任することを承諾
しました。彼は表だって正面に出ることをあまり好まなかつたのですが、この時、会
長就任を決意したのは、クラブをもっと充実させたい、シカゴ以外の他の地域にもク
ラブを作りたい、前年の定款追加にもあるシカゴ市に対する奉仕を實行したい、とい

う三つの理由によるといいます。そこで手ははじめに、今シカゴ市で何が必要か、と調べた結果、公衆便所を寄附することになったのであります。

これはロータリー社会奉仕の第一号として有名な話ですが、社会奉仕とか、その他諸々の奉仕概念を構築して、色々奉仕活動の枠組を考えるなどというのは、ずっと後の話で、初期のロータリーは、ただ何でもいいから世の中のためになることをやろう、ということに過ぎなかったのです。どんな組織でも、大きくなるに従って段々複雑になり、現実ばなれしていきますが、このへんのこととも我々は考え直さなければいけないでしょう。

それはさて置き、ポール・ハリスが会長に就任してロータリーに活をいれたその翌年、即ち一九〇八年は、やはりロータリーの骨格形成に重要な役割を果たした二人の人物を会員に迎えたということで、記念すべき年となりました。ポール・ハリスは當時を回顧してこう言っています。

「ロータリーが発足して間もない頃の一夜、天の加護を得たというか、この運動に不滅の足跡を残した二人の人物がシカゴ・クラブに入会した。即ちアーサー・シュエルドンとチェス・ペリーで、二人は共に火の如き十字軍の情熱に燃え不撓不屈の意志を持っていた。」

チェス・ペリーは一九一〇年から四二年、七十歳で退任するまで三十二年間、幹事

そしてR・Iという組織になってからの事務総長として精励した人物で、組織としてのロータリーの骨格を作ったのは正にこの人でありました。「ロータリーに於て私は設計者で彼は建設者である」、とポール・ハリスは言っています。

このペリーに対して、ロータリーの精神的骨格を作ったのがアーサー・シェルドンで、彼によってロータリーに於ける奉仕の理念が確立されたのであります。この時からロータリーは初めて、他の社交クラブ、親睦団体と明らかに違う独自の性格を持った、「奉仕する職業人のクラブ」となったのだ、と言っても過言ではありません。

彼がシカゴ・クラブに入会した、その一九〇八年に、初めて二番めのクラブとしてサンフランシスコ・クラブが出来、それから引続いてアメリカ各地にロータリー・クラブが誕生しますが、一九一一年、第二回全米ロータリー連合会がポートランドで開かれた時、シェルドンは生憎これに出席できなかったため、同僚会員にメッセージを托し、「経営の科学とは奉仕の科学である。すなわち、*He profits most who serves best* [である]と読みあげさせました。これを聞いて一瞬満場肅然となり、次で万雷の拍手が沸き起こったといえます。

これを受けて、今度はミネアポリス・ロータリークラブの初代会長フランク・コリンズが立ち上り、「ロータリーの組織に於てなすべきことは一つ、それは直ちに行動を起こすことである。自己のためにロータリーに入った者は間違った会員で、ロータリー

は自己のためではない。ミネアポリス・クラブが採択し、一貫して保持してきた原則は Service, Not Self である」と述べましたが、ここに我々は初期ロータリーの情熱を汲みとることが出来ます。

その後いろいろの経緯を経て、この “He profits most who serves best” と共に “Service, Not self” が “Service Above Self” と修正されて、両者を共にロータリーの公式標語とすることになったのでありますが、その間の紆餘曲折については省略致します。

要するに、これでお分り頂けるように、ロータリーとは職業人の集まりである。そしてロータリーにとって最大の関心事は、その会員である職業人が、自分の職業に取り組むにあたって、どういう心がまえをもって臨み、実際にどういう行動様式を取るのか、ということなのであります。これこそロータリーの根幹であって、この点は初期ロータリーから今日に到るまで、一貫して変わらないし、また将来も変るべきでない生命線だと信じて居ります。

もっとも、こういうことを言うと、必ず次の様な反論が予想されます。

「君の言う所は所謂職業奉仕の問題であって、それだけがロータリーではない。今日のロータリーは四大奉仕の外にも数多くの奉仕部門を持っている。殊に国際ロータリーという大きな国際組織になった現在、世界平和のため、人類の幸福のため、奉仕

しなければならぬ多くのプロジェクトがあるではないか。そういう時代に職業奉仕だけを強調するのは、時代錯誤の古典派ロータリー論だ。君の言う様な職業上の深刻な問題、不正取引などというのは、第一ずっと昔のアメリカの話であって、今の世の中でそんなことが出来るというのか……」

よろしい——ここに挙げられた一つ一つの問題について、私は全部説得できる論拠を持って居るのですが、今日は話を出来るだけやさしくする約束ですから、簡単な実例だけ申し上げます。成程詐欺や泥棒は許されません。これは刑法で処罰されますからロータリーの関与する問題ではないでしょう。然し、先程シカゴの話の中で「騙される方が馬鹿だ」という道徳観に触れましたが、現在そういう問題は解決しているでしょうか。不動産取引、商品相場、訪問販売、誇大広告、等々到る所でトラブル続出はありませんか。更に先端技術のスパイ事件、一国の首相まで巻き込んだロックheed事件、あるいは深刻な貿易摩擦、地球全体に広がる環境破壊——これが国際的な大問題でなくて何であります。然もそのすべてが、我々職業人の関与する問題であって、こう見てくると、職業人の責務は国際的な広がりをもって、初期ロータリーの時代とは較べものにならない位重大になってきています。社会奉仕、職業奉仕、国際奉仕、青少年奉仕……などと概念論で奉仕を分類し、セクシヨナリズム的に奉仕活動を考えるからおかしなことになるのであって、初期ロータリーの先達の様に、もっと単

純明快に、奉仕を一体のものとして考えてみたらどうでしょう。古典派と言われますが、古典は永遠の生命を持っています。「古いものが最も新しい」という真理を敢て私は宣言します。これは決して詭弁ではありません。

誤解のない様言っておきますが、私は決して社会奉仕や国際奉仕を否定しているのではありません。ただロータリーという大木は、クラブ奉仕——殊に親睦・友愛という根を大地にしっかり張って、そこに職業奉仕という大きな幹が育ち、その幹から社会奉仕、国際奉仕、青少年、財団、等々多くの枝を出しました葉を茂らせているものなのだ、ということをお忘れてもらっては困るのです。

もう一つ、こういう質問を受けることがあります。「ロータリーが職業倫理をやかましく言うのは分るが、この競争のはげしい経済界で、そんな綺麗事で事業が出来るだろうか」というのであります。

これに対しては、私は「四つのテスト」という、ロータリアンなら誰でも知っている標語を呈示するより外に術すべがありません。

- 1 真実かどうか
- 2 みんなに公平か
- 3 好意と友情を深めるか
- 4 みんなのためになるかどうか

そして、ここにいう「みんな」とは、自分が当面する直接の相手方だけでなく、広く言えば社会全体、公益、という様に私は解釈します。これで出来ない様な事業なら、そんな事業はやめてしまったらいいのです。

然し、実際はこれこそ事業成功の秘訣であって、この標語は実証されたものなのです。

その物語をここで紹介しましょう。この標語を作ったのはハーバート・テラーですが、一九三二年、彼は債権者の依頼を受けて、破産状態に陥っていたシカゴのあるアルミ食器製造会社の再建をすることになった。然し、いざ社長に就任して色々調べてみると、会社の内容は絶望的とも言える程ひどいものであった上、他に有力な同業の競争相手もありました。そこで彼が考えたことは、このどん底状態から抜け出すには、労使一丸となった崇高な使命感、精神力を振りおこすしかない、ということでした。計数的な管理手法などは後まわしにして、半年間、考えに考えぬいた末、彼はこの四つの標語に到達したのです。そしてこの経営方針のもとに、全社員力を合わせて努力した結果、当初六、〇〇〇ドルあった銀行からの借入金も、十年後には全部返済した上、株主には百万ドルの配当を出せる様になりました。

その後一九五四年に、テラーはR・I会長に就任しましたが、彼はこれこそ職業人の行動規範になるものと考え、これを国際ロータリーの標語として寄贈した、と

いうわけです。勿論これは、会社経営ばかりでなく、我々の日常生活すべてにわたって適用できるものであって、ロータリー精神を一番わかり易く表現しているものと言えましよう。また、*“He profits most who serves best”* や *“Service Above Self”* という哲理を、具体的行動指針として置き換えたのがこの「四つのテスト」であって、これこそロータリーの真髄であります。

外国の話ばかりでなく、日本のロータリーの事例も一寸お耳に入れましよう。戦前、大連ロータリー・クラブは「ロータリー宣言」という五ヶ条の宣誓文を作りましたが、その第一条に

第一 須らく事業の人たるに先立ちて道義の人たるべし。蓋し事業の経営に全力を傾倒するは因って世を益せんがためなり。ゆえに吾人は道義を無視していわゆる事業の成功を獲んとする者に与くみせず。

と謳っています。また一九二六〜二七年度にスペシャル・コミッションを、一九三一年から三三年にかけて二期ガバナーを務めた井坂孝さんは、そのガバナー月信第一号で賄賂禁止令を出しています。日本の初期ロータリーに於ける「尚志」の心が輝やいているではありませんか。

はしなくも「尚志」という言葉が出ましたが、これを要するに、ロータリーというのは、奉仕という「志を尚たかうする」場なのです。そして更に『孟子』を引用すれば、

「何をか志を尚たかうすと謂う 曰く仁義のみ」となり、仁は二人という文字構成ですから、常に相手方を念頭においた道義という意味になります。「四つのテスト」をロータリーの真髓と言いましたが、これをもっと煮つめて一番短い簡単な言葉で表現しろ、と言われたら、「相手の立場になって考える」ということになりましょう。

この世の中のことばは、人と人との間柄に於て、発生し、変転し、消滅し、結実しているのです。この間柄を、堅く言えば道義的、倫理的にもっと軟かく詩的に表現して美しく楽しく心やすらかなものになりたい、というのがロータリーの願であります。だからロータリーは「間柄の美学」なのです。

では最後に、「ロータリーの精神はそれで分ったが、それならロータリー・クラブとは何なのか？」という質問を設定して、これにお答えしましょう。

それには先ず、ロータリーをも含めて、凡そフラタニイティとか、アソシエーションとか、クラブとかいう私的結社が、世界中数えきれないほど沢山あるのは何故なのか、という問題を考えなければなりません。こういう任意集団は、ずっと古く原始社会からありますが、我々が注目したいのは、これが近世アメリカ社会で爆発的に発生している、という事実であります。

このアメリカの問題については、既に冒頭に述べて居りますので答の半分は出ているわけです。最初にロータリーと直接関係なさそうなフリー・メイソンの話などした

のは、この最後の設問に繋ぐ意図があったからです。

さて人間が人と人との間柄に於て存在し、その間柄に於て自己確認できるのだ、という真理から出発すると、開拓時代の殺伐なアメリカに於ける結社の必然性はもとより、現代に於ても、夫婦を中心とした排他的な核家族単位の社会に於ては、家族以外の人間との連帯関係を求め、その中に自己確認、人間生長の契機をつかもうという欲求が、昔の血縁、地縁関係の強固だった時代以上に強くなるのも、よく理解できる所でありましょう。これはアメリカだけの話ではありません。都市化、工業化が進んだ管理社会で人間の連帯性が失われていく所、必ずや何等かの集団への帰属意識が高まっていく道理です。

要するに、自由結社は、一方で個人の自由独立を際限なく求めながら、それでいて人と人との間柄に於てしか自己の存在を確認できないという宿命を負った人間の、この所の抛り所なのであります。

そういうわけですから、クラブというものは何よりも友愛親睦を大事にします。血の通った連帯の薄れた現代管理社会の中で、クラブこそこのオアシスです。そしてロータリーという名を冠したクラブは、職業人が集まって親睦のオアシスで心を洗い、奉仕の自己確認をする場所なのだ、と私は理解しています。

然し問題は、現在のロータリーが果してそういう期待に応えているかどうか、とい

うことです。ロータリーの将来については、樂觀的な人もあれば、極度に非觀的な人もあります。ロータリー・クラブが我々にとって必要なことは確かです。然し必要だから当然に存続し発展するというものではありません。ロータリー・クラブが本當にロータリー・クラブとして機能するかどうか、ロータリーの運命がかかっているのです。

「今や我々は人類全体に奉仕する道を考えなければならない」、という高邁な理念に間違はありません。然し、實際問題として、そういう崇高な理念でロータリー・クラブに会員が集まると思っているのでしょうか。クラブというものは、もっと生臭い日常生活の中のオアシスであつたはずで、血の通つたところの拠り所としての機能を失つたクラブは間違ひなく衰退します。これから益々厳しくなる条件の中で生きていかなければならない職業人として、我々が本當にロータリーに期待するものは何なのか、皆様から忌憚ない御意見をうかがいたいと存じます。